



「旅立ちの地」エッセイコンテスト

入賞

三月

宮田 千晴 鹿児島県

二〇二四年三月。十八年間の中で、一番落ち着かなかった一か月。

小学校六年生の時に担任の先生が教えてくれた「やってみよう」という歌。この担任の先生に、挑戦することや一歩踏み出すことを教わり、中学受験を受けた。知らない土地へ行くのが楽しみで仕方なかった。そして小学校の同級生と離れ、新しい場所に足を踏み入れた。

高校生活は忙しいものだったが、充実していると感じていた。しかし、私は大事なことを忘れていた。大きな問題があることを。

高校二年生。進路相談にて。小児科医になりたいと担任の先生と母親の前で口にした。担任の先生からは厳しいことをいわれたが、もともと自分の成績じゃ厳しいことは分かっていたので、まあそうだろうなと思っていった。勉強はもともと嫌いではなかったけれど、すぐにやる気が生まれないうのが私の悪いところだ。担任の先生に言われて

から、少しだけ勉強量は増えたが、それでも誰が見ても十分な勉強量ではなかった。学校生活や課外活動の忙しさにかまけていたのだった。高校二年生の冬。祖父を亡くした。初めて身近な人を亡くし、病気の怖さを知った季節。成績は上がったが、目標には及ばなかった。

高校三年生。相変わらず忙しい日々を送っていた。勉強が二の次になっていたのは、今振り返ればわかることで、当時の私はそれに気づかなかつた。それほど毎日が楽しくて仕方なかった。夏になり、受験勉強一本によく絞った。それから共通テストまでの日々は私にとってとても辛いもので、すぐにその日がやってきた。

共通テスト。一日目の当日の朝、空は晴れていた。心の天気は空とは真逆の嵐に近いものだった。そして一日目、終了。二日目の朝も晴れていた。二日目、最後の科目の終わる時間が遅く、あたりは薄暗かった。その時の帰り道での友達との会話が最近なかったと感じるほどゆったりとして居心地がよかった。薄暗さもその日は好きになれた。共通テストの次の日は自己採点。自己採点の結果は自己最高得点ではあったものの、目標には到底及ばない点数だった。現実の厳しさを理解した。その日はあまり周りが鮮明に見えておらず、家に帰ってご飯を食べ、ベッドに潜って泣いた。祖父を亡くして以来だ。

受験校決定のための三者面談では、母親と担任の先生の前で大喧嘩を繰り広げた。母親と私の考

えは少し違っていった。それがその時の私には受け入れがたく、思わず頑固になってしまったのだ。その後、第一志望は母親の言う通りの学校を受けることになった。そして、第二志望校を決めることになり、担任の先生が一言。

「教師向いてると思うぞ」

結局、その一言がきっかけで第二志望は教育学部の特別支援が学べるところを受けることになった。

そして、三月。一番初めの出来事は卒業式。まだ進路も決まっていない中で、卒業を迎えて嬉しさも孤独感も不安もあった。そして、第一志望の合格発表。サイトを開いても、そこに私の番号はなかった。一週間後に第二志望。悔しさの方が大きかったため、切り替えられた。そして合格発表。第一志望より偏差値が高い大学だったので、諦めかけていた。しかし、私の番号はそこにあった。

こうして私は新たな場所へ旅立った。今回は中学受験の時とは違う。ワクワクだけでなく、結果への悔しさも嬉しさもある。そして、初めての地で初めての一人暮らし。いつも楽観的と言われるけれど、不安もある。それでも今を私らしく歩んでいる。小児科医の夢も諦めておらず、教員免許をとり、また受験に挑もうと考えている。私の新たな夢は小児科医として働きながら、学校に行けない子供たちに勉強と自分の経験を教えることだ。これからは新たな夢への旅立ちに突き進んでいく。